



美熟女義母

湯けむり艶肌淫戯

庵乃音人

挿絵／李KPA

リアルドリーム文庫／PDF立ち読み版

プロローグ	初めての、ママの裸	4
一日目	秘密の混浴淫戯	7
二日目	せつない想い	37
三日目	美少女の夜這い	62
四日目	嫉妬と劣情の淫獄	112
五～六日目	浴衣美女と湯けむりの宴	169
エピローグ	旅立ち	244

登場人物

Characters

桐原 繭子

(きりはら まゆこ)

主人公・直也の血の繋がらない母親。豊満な乳房と肉感的な肢体を持つ美熟女で、清楚、可憐、優しく母性愛に満ちた奥ゆかしい女性。

秋月 璃里

(あきづきりり)

直也の元・家庭教師にしてお見合い相手。若々しく伸びやかな肉体を持つ美少女で、性にも積極的。

桐原 直也

(きりはら なおや)

奥手で生真面目な美少年。美しい義母を密かに恋い慕っている。性と女性の身体に興味津々な年頃。

繭子と二人つきりて入る露天風呂のなか。

自分の身体の淫らな変化を感じた直也は、一人で狼狽していた。

一緒に入るだけで、絶対に何もしない——それが、彼が義母に約束したことだった。事実、約束を破って何かしでかすつもりなんて微塵もなかった。

そもそも、「一緒にお風呂に入って！」などと口にしてしまってから、まずうろたえ、続いて繭子に「分かったわ」と言われてからまたうろたえと、さっきからずっとうろたえっぱなしだったのである。

だが、育ち盛りの少年の肉体はやはり正直だった。異性の肉体への興味津々の年頃。しかもすぐそばに一糸まとわぬ姿でいるのは、この世で一番好きな女性なのだ。

さらにいうなら、その女性は、そんじょそこらでお目にかかれない超絶の美貌と、悩殺的なダイナマイトバディを持つ極上美熟女と来ている。

(どうしよう。完全に勃起しちゃった)

陰莖は口ほどにものをいう。もちろんそんな諺ことわざはなかったが、直也が考えていることは、彼の股間が雄弁に物語ってしまった。

「どうしてそんなほう向いてるの？」

そんな彼の背中に、色っぽい繭子の声が飛んだ。

いつの間にか直也は、義母に背中を向けるような体勢になっていた。

「べ、別に」

「せつかくなんだから、お話ししましょ。お見合いのことで、直ちゃんだって聞きたいことあるだろうし」

それなりに長い付き合いだ。義母も必死になって何気ないふりをしているのが、直也にはよく分かった。同じお風呂に身を沈めてからの気詰まりな雰囲気は、彼だって何とかしたいと思っていた。だが今は、それ以上に羞恥心がまさった。

「ほら、こつち向いて。直ちゃん」

「あつ」

繭子の手が肩にかかり、自分のほうに向けようとす。

温泉の湯独特のぬめりで、湯舟の底もすべりがよかった。彼は呆気なく、くるりと身体を反転させられそうになり、慌てて股間を両手で隠そうとした。

すると、今度は繭子が「あつ」と声をあげた。気がつかれたと、直也は思った。

それほど派手に、彼の肉棒はお湯のなかでダイナミックに揺れてしまった。盛んに股間を気にする彼の仕草も、繭子の意識をそこに向けさせるのに充分だったはずだ。

小さく呻きながら、繭子の手が肩から離れる。直也は顔が熱くなるのを感じた。

あまりの恥ずかしさから、一気に捨て鉢な気持ちになる。

「マ、ママ。ちよつとでいいの。あの……おっぱい触っていい？」

言葉にしたら、今度は全身がカツと火照った。

繭子が表情をこわばらせ、全身を硬くするのが分かる。

「そ、それは……直ちゃん、約束が……」

「それ以上望まない。ほんとだよ。それだけ……それだけだから」

自分でも、まるで駄々っ子みたいだと思つたが、ペニスを勃起させている自分を見られてしまった恥ずかしさが、いつになく彼を凶々しくさせた。

「そうしたら……ほんとにママの言うこと、聞いてくれるの？」

しばらく躊躇してから、繭子は声を震わせて聞いた。彼と目を合わせられず、火照つた顔をあらぬほうに向けている。

「聞くよ。聞くから！ いいんだね、ママ。いいんだね」

繭子は答えなかつた。答えないのが、彼女の解答だという気がした。

「ああ、ママ……ママ！」

直也は訴えるような声で言い、美しい義母に身を寄せると、彼女の胸元に手を伸ばした。ぐにやり——温かく柔らかな肉房に、五本の指が食い込む。

(えっ、嘘。や、柔らかい……)

こんな柔らかかなもの、今まで一度として触ったことがないぞと思いつながら、少年は五本の指をカギのように曲げ、繭子の乳房を驚掴みにした。

「ああ……」と繭子が、哀切な吐息を漏らす。

そんな義母の反応も、彼を猛然と昂ぶらせた。

直也は二度、三度と指を開閉させて、繭子の乳房を揉む。

すべすべつるつるした、ゼリーのような感触の肉肌。その内側にたつぷりと詰まった脂肪塊はどこまでも柔らかく、揉めば揉むほど、少しずつ卑猥な弾力感をたたえだす。バストサイズは間違いなく九十センチ以上はあった。

「ああ、ママ。おっぱい、柔らかい。ママのおっぱい、ああ……」

次第に脳髓が妖しく酩酊していくのが分かった。

酸味の混じった快美感がじゅんと股間を疼かせ、心臓の鼓動が速まる。

「な、直ちゃん。ああ……も、もう、それぐらいにして。ああん……」

繭子はせつなそうに呻き、半開きの唇から吐息を漏らした。甘くて熱い息だった。

少年はもうたまらない。もつともつと、という突かれるような衝動が、彼をますますわがままにする。直也はさらに力をこめ、下からせり上げるように義母の豊満な乳

房を揉みこねた。気がつけば、彼の身体はいつそう母親に密着している。

「はあはあ、ああ、ママ、すごい。すべすべして……おつきくて、や、柔らかで。ああ、それに乳首……すごい綺麗だ」

直也は義母の乳房をネチネチと揉みこねつつ、その先端に熱いまなざしを注いだ。思わずうつとりと見とれたくなるような、淡く儂げな桜色をした可憐な乳首。乳輪の中央にあるそれは、直也が刺激したせいか、いつの間にかまん丸に勃起している。

「お、お願い。もう、ほんとにそれぐらいでやめ——」

「ああ、ママ！」

彼は猛烈な肉欲に理性を蝕まれ、許されてもいないのに、ついに義母の唇を求めた。勢いに任せた性急な接吻。

彼の唇に押し寄せ、柔らかな繭子の唇がぐにやりと歪み、真っ白な歯が覗いた。

「あ、直ちゃん、いけない……ちゅぱ……だ、だめ……」

「ママ。ああ、ママ。言うこと聞くから。お見合いですればいいんでしょ？　ちゅうちゅう……」

（や、柔らかい！　そして、ああ、いい匂い。ママとキスしちゃった！）

直也は脳髓を甘酸っぱく締めつけられる思いにかられながら、右へ左へと顔をふり、

長いこと憧れ続けた美しい母親の唇を吸う。

「や……や、やめて、直ちゃん、話が……ちが、う……」

「お見合いするよ！ ママの従妹の女の人と、お見合いすればいいんでしょ？ するから……約束するから」

「な、直ちゃん……ぢゆるぢゅば……」

「僕、ファーストキスなんだよ、ママ」

少年が言うと、豊満な肢体の美熟女は「えっ」と小さく答えた。

「ママにもらつてほしかったんだ。ママに……」

「ああ、直ちゃん……むはああ、ああ……」

二人は狂おしい、糸を引くような熱烈な接吻に身を焦がした。

吸えば吸うほど、繭子の唇は柔らかくふやけ、餅のように彼の唇に吸いついてくる。疼くような性衝動を持てあました少年は、身体が破裂しそうなこの興奮を、完全に持てあましまきつっていた。彼は自分の唇を、愛しい母の唇に押しつけるだけでは飽きたらず、舌を突き出し、口のなかににゅるりと強引に割り込ませる。

「ひんっ。ん……んああ、直ちゃん……ああ、きやん……」

「はああ……ああ、ママ……むはああ……」

繭子の上唇と齒茎の間に舌を挿入し、齒列と齒茎を掃除するように、右から左へ、左から右へと動かす。

美しい義母の上唇は内側から盛り上がり、彼の舌の位置に合わせて形を変えた。

美貌の熟女の齒はつるつるとし、齒茎は凸凹しながらもキュツと締まって彼の舌を弾力的に押し返してくる。舌のせいで鼻の下を突っぱらせ、可憐な美貌を艶やかに歪める繭子の顔も、少年の肉悦をいつそう苛烈に燃え上がらせた。

「ママ……ああ、ママ。むあああ……」

「ああ、やめれ、直ちゃん、くすぐつらい……んはあ……ああっ……くふうっ……」

風呂のなかだというのに、繭子の肉体にぞくりと大粒の鳥肌が立った。

自分の責めが、義母を確実に刺激していることに、直也は震えが来るほど興奮し、さらなる責めで繭子を狼狽させようとする。

「きちゃん……あん、直ちゃん、らめ……むふうっ、おっ……おおっ……」

直也は上の齒列と齒茎だけでは飽きたらず、今度は下唇と齒茎の間に舌を差し込み、同じように丁寧な舐めあげた。そしてさらには、上から下、下から上へと、三百六十度舌を回転させ、美熟女の齒列と齒茎の淫靡なお掃除役を務める。

拙いけれど熱烈な舌奉仕。

時折舌がはずれ、繭子の口のまわりを舐めてしまったりするため、直也の愛しい義母は、あつという間に唇の周囲を彼の唾液でベチョベチョに濡らす。

「な、直ちゃん、やめれ……はあはあ……」

「お見合いするよ。すればいいんでしょ、ママ！」

「うんうつ、直ちゃん……」

（そうさ、他の女の人のものになってもいいって言うんでしょ、ママ。僕はママのことがこんなに好きなのに。ママの馬鹿！）

直也は泣きそうな気分になりながら、繭子の柔らかかで豊満な乳肉を揉みこね、勃起乳首を指で弄^{いじ}くつた。

硬くて柔らかい、湿ったグミのような感触。乳輪の大地に押し倒すと、何度でもびよこりと元気に元に戻る。少年は、次第に意識が朦朧としてきた。

「あふん、だ、だめ、直ちゃん、いけないわ……わ、私たち……親子——」

「ああ、ママあ！」

彼は、義母の全裸の肢体にももの狂おしくむしゃぶりついた。挑むように盛り上がった柔らかな胸元に顔を埋め、痼りに痼った乳首を口に含んでちゅうちゅと吸う。

「あつああ……や、やだ、直ちゃん、そんなことしちや……ああっ!？」

「ちゅぶちゅぶ……ああ、ママの乳首……」

「ああっ!」

固く勃起して熱を持った男根を、直也はぐいぐいと義母の仄白い身体に押しつけた。そうすることで、言うに言えない自分の想いを彼女に伝えたかったのだ。

「ひい、な、直ちゃん……ああっ……」

大人の女である繭子が、自分の淫靡なボディランゲージに気づかないわけがないと直也は思った。案の定、義母は少年の責めに狼狽し、妖しく乱れつつも、

「だめよ、だめだめ……こ、これ以上は……これ以上は……!」

と彼の身体を必死に押し戻そうとする。

だが、子供とはいえそこはやはり男。力では、直也がまさった。彼は乳房の肉クツションに顔をうずめ、甘える幼児のように顔を左右にふりながら乳首を吸った。

もう片房は五本の指で鷲掴みにし、勃起乳首を指で擦りながら、飽くことなく、何度も何度もグニグニと揉みこねる。

豊満な乳房は、そのもちもちした柔らかな弾力はもちろん、いやらしく無限に形を変えその淫猥な眺めでも、少年を猛烈に興奮させた。



直也は「うん」と返事をし、片手でズボンのベルトをはずそうとした。

「ママが脱がしてあげる」

すると繭子が布団から起き上がり、淑やかさと妖艶さが混じり合った色っぽい拳措で、少年を仰向けにさせた。彼の足元に移動し、ベルトを弛め、ジーンズのボタンをはずしてファスナーを下ろす。トランクスと一緒にジーンズを脱がそうとした。彼は繭子が脱がしやすいうように、わずかに尻を浮かせて協力する。

小首をかしげるようにし、はにかんだ笑みを浮かべながら、繭子は少年の下半身からジーンズと下着を脱がせた。

彼の股間は汗ばんでいた。

イカ臭い腐臭を湯気のように立ちのぼらせ、隆々と勃起した陰茎が露わになる。

包皮に半分ほど包まれた亀頭が湿った音を立て、直也の腹をたたいた。

彼の両脚の間に身体を潜りこませると、繭子は逞しく反り返った息子の一物を淫らかな目つきで見下ろし、そつと握りしめた。

ビクン——少年の身体に電流が走る。

「剥いてあげる」

いやらしい声だった。繭子は凄艶な笑みを浮かべると陰茎の肉皮をそろそろと下方

に引きずり下ろす。直也は「ああ」と呻いて背筋をしならせた。

義母が肉皮をさらに下に引つ張る。皮の先端部がまん丸に開いて突っぱり、赤紫色の肉肌をてからせた亀頭が、なかから飛び出しそうになった。

にゆるん——包皮が肉傘の下まで剥かれ、鈴口が完全に露出した。包皮と亀頭の間にこもっていた熱が湯気に変わり、ほんわかと生臭い匂いを立てて立ちのぼる。

「むふうう、直ちゃん。可愛い。しごいてあげる。しごいてあげる」

繭子は感極まった震える声で言うと、しこしこ直也のペニスをしごき始めた。直也は低く呻いて全身を硬直させ、ピンと爪先を伸ばす。

緩急をつけた絶妙の手コキ。ただ肉幹を単調にしごきあげるだけでなく、丸めた指をさりげなくカリ首の縁にも擦りつけ、亀頭にも愉悦の刺激を注ぎ込んでくる。

「ぐああ、マ、ママ……」

少年はたじろいだ。璃里とは全然違う、まさに大人の女ならではの技巧。

繭子は息子のペニスをしごき、直也が湧き上がる快感にその身を痺れさせ始めたのを見計らったかのように、突然ぱくりと、猛る一物を口のなかに含んだ。

「うわつ、ああ、ママあ」

「ぢゅぶ、ぴちゃ、ぢゅる……」

義母の温かな口腔粘膜が全方向から陰茎を絞り込んでくる。そこに舌による責めも加わり、直也は我慢できずにビクビクと身体を痙攣させた。

やがて繭子は、肉棒全体を舌と口腔粘膜で舐めほぐしてどろどろの唾液まみれにする。上下に首をふり、彼のペニスをリズムカルに刺激し始める。

手コキと同様、肉幹部分ばかりではなく、肝心要かなめの亀頭にもキュツと絞り込むような愛撫を加えてくる巧みなフェラチオに、少年は天にも昇るような気分になり、うっとり脳髓を麻痺させた。

「ぐはぁ、気持ちいい。ママ、僕にまたがって。僕も舐めたい。ママのあそこ……」
「うふう、ぢゅふう、直ちゃん……」

繭子はちよつと恥ずかしそうにしながらも、少年の陰茎を口に咥えたまま身体の向きを変え、彼の身体にまたがってきた。直也は股間から湧き上がる強烈な愉悦に必死に耐えつつ、義母の浴衣の裾を掴み、一気呵成に腰の上までたくし上げた。

「きやん、いや。な、直ちゃん、くふつ、ぢゅばぢゅる……」

「むあぁ、ママ、すごい……」

眼前に露わになった巨大な尻桃の眺めに、少年はさらに妖しく脳髓を白濁させる。たっぷりと肉の乗った圧倒的ともいえる豊臀の迫力は、まさに年輪を重ねた熟女な

らではの壯観だった。スケスケのビキニショーツが食い込むように肉肌に貼りつき、尻の谷間にひっそりと息づく肛肉までをもうつすらと透かし見せている。

あまりの興奮のせいで、視界がフラツシユみたいに白く明滅した。透け見える肛肉の下には、熱い股布に覆われた恥丘の眺めがあった。相変わらず、ふっくらと柔らかそうに盛り上がった究極の猥褻スポット。激しい動きの連続のせいで、今日もまた、布の左右に縮れた陰毛の毛先が何本も飛び出しているのがいやらしい。

直也は「ママ」と甘えるように言いながら、シルクのショーツに指をかけ、肛肉、蟻の門渡り、卑猥な発情汁をしとどに溢れさせ始めた牝肉のほころびをいっぺんに露わにさせた。甘酸っぱい、馥郁たる芳香が、熱風のように彼の顔を撫でる。

繭子の牝割れは早くもはしたなくふやけ、ピンク色の肉ビラがしどけなく開花している。まるで剥き身の貝肉に蜂蜜を塗りたくったような、下品な眺めだった。

脛粘膜から溢れ出した濃密な愛液が、股布の裏地との間に下品な糸を引き、ラビアの間から漏れた汁が、布団に向かってつとつと粘り伸びる。

「ああ、ママ。ぴちゃぴちゃ、ぢゅぷ……」

恥悦をそえられる扇情的な光景に理性を粉碎された直也は、繭子の恥溝に吸いついて、激しく舌を踊らせた。ラビアのぬめりをこそげぞり、脛粘膜の隆起を真っ平らな

ものに変えるような熱烈な舌愛撫。舌が激しく動くたび、それを包み込むような形になった左右の肉ビラがくねくねと蠢く。

「ママ、分かる？ 舌でほじってるよ」

燃え上がるような肉欲で、身も心も完全に痺れきった少年は、わざと下劣な言葉を口にして愛しい義母を辱めた。

「ひいい、直ちゃん……は、恥ずかしい……ちゆるぶ、ちゅぱ……」

「言つて、ママ。ほじられてるつて。マ○コ、ほじられちゃってるつて」

少年は繭子の恥肉を舐めながら、そう催促した。だが、可憐な義母はいいやいやとかぶりを振り、「そ、そんなこと……言えない……」と哀切に呻く。

その羞恥に震える色っぽい姿が、よけい直也の興奮を炙った。

「言つてくれないの。だったらこうしちゃうよ」

新たな宣戦布告のように言うと、右手の指をクリトリスにあてがい、左手の指は尻の谷間にすべらせる。

「ああ！ ああ、いや。直ちゃん、だめ。あああ！」

彼のペニスを咥えたまま、義母は艶っぽい淫声を跳ね上げた。

舌で秘割れを舐められつつ、片手で淫核を、もう片方の手でアナルを愛撫される卑

猥な三点責め。熟れた肢体を持ってあましていたはずの貞淑な未亡人が、歡喜の嬌声をあげるのも無理はない。

「ひい。ひい。直ちゃん、だめ。感じすぎちゃう。ひゃひい」

「言うことを聞いてくれない罰だよ、ママ。ほら、もつと感じさせてあげる」

肉芽は、いまだ包皮に包まれたままだった。直也は鞞のなかから枝豆を飛び出させるような手つきで肉鞞を潰し、皮のなかから剥き身の肉真珠を露出させる。

ぬるぬるとぬめる肉豆をダイレクトに指の腹で揉みこねると、繭子の喉からはさらにつけたたましい声がほとばしった。そんな義母の反応に気をよくし、直也は尻の谷間をほじる指にもいつそう淫らな力を漲らせた。

「あひい。い、いやあ、感じちゃう。直ちゃん、だめえ」

「言ってくれなきゃ許してやらない。お願いだよ、ママ。言つて。マ○コほじられて気持ちいいつて。マ○コ豆とお尻の穴もいやらしくほじられちゃつてるつて」

舌と両手の指を使って、過敏な神経の密集した恍惚地帯を責め廻りながら、直也はもう一度繭子に強要した。下半身を丸出しにした艶やかな豊熟美女は、彼の責めに熟れた尻肉を振り乱し、口に啣えこんだ息子の陰茎を一心に舐めしごく。

ジュポジュポという下品な擦過音が直也の股間から、ニチャニチャピチャピチャと

いう秘めやかな粘着音が繭子の股ぐらから響き、くぐもった二人の呻き声がそれに重なった。「うう、興奮しちゃう」——淫らな肉悦に全身を呪縛され出した浴衣姿の美女がうわずつた声で艶めかしく言い、息子の指にほじられるアナルの肉を、呼吸でもするように開閉させた。「さあ、言つて」ともう一度直也は強く命じる。

「ああ。ほじられちゃつてる。オ、オマ○コ……オマ○コ直ちゃんにほじられちゃつてる。マ○コ豆とお尻の穴も……い、いやらしく……ほじられちゃつてるうう」

ああ、とうとう言つた、と直也は歓喜し、息のしかたさえ忘れるようなもの狂おしい恥悦の虜と化した。

繭子の口から、こんなはしたない言葉を聞いたのは、もちろん初めてのことだ。

こうした卑語など絶対に口にしそうもない清楚な美女が、羞恥と興奮を同時に滲ませた淫らな声で、恥を忍んで言つてくれたのかと思うと、叫びだしたい喜びを覚える。

「直ちゃん、ママ、恥ずかしい。恥ずかしい。意地悪。直ちゃんの意地悪」
猛烈な欲情を感じさせる色っぽい声で、繭子が言つた。

「ママ、ごめんね。でも僕、すぐく興奮しちゃう。もう我慢できない」
本音だつた。彼は腰を振り、義母の口からペニスを引き抜く。

ちゅぽん、という間抜けな音とともに陰茎が飛び出した。繭子の口から涎が溢れ、

布団の上にとろどろと滴る。直也はすばやく起き上がると、浴衣姿の義母を四つん這いの格好にさせたまま、彼女の背後に膝立ちになった。

「ママ、チンチン入りたい。もう限界だよ。ねえ、入れていい？ 入れていい？」

義母の背後ににじり寄り、震える手つきももどかしく、彼女の股間からショーツを脱がすと、唾液まみれになった肉棒の先端を、ぬめる膣粘膜に擦りつける。甘酸っぱい激感が、亀頭から全身に爆ぜた。

手で動かしてラビアの狭間を掻き回すようにすると、獣のような姿に突っ伏した繭子が、「ひいひい」と一際艶めかしい嬌声を跳ね上げる。

鈴口に掻き出されるようにして、牝の肉割れから愛蜜と唾液の混合汁が飛び散った。「はひい、直ちゃん。ママも入れてもらいたい。直ちゃんのオチンチン」

恥も外聞もかなぐり捨てたような、切羽詰まった声だった。言うに言えない想いを伝えようとするかのように膣穴が蠕動し、鈴口を咥えこんだ肉ビラがキュツと締まる。酸味の混じった強烈な痺れが直也のペニスを貫いた。

脳髓のなかでピンクの火花が閃く。少年は「ママ、入れるよ。入れちゃうよ」と言いながら亀頭の位置を決め、美熟女の尻肉を掴んで勢いよく腰を突き出した。

「あはあ。直ちゃん。はああ！」

繭子はしなやかな背中を弓のようにたわめ、天に向かって高々と尻を突き上げた。

直也は快感の呻きをあげつつ、ぬめる窮屈な膣肉のなかを、奥へ奥へと陰茎を埋めた。思わず「ひい、気持ちいい」という嘆声漏れる。子供を産んでいないせいもあるのか。繭子の膣は、熟れた女体にふさわしい豊潤な潤みをたたえていやらしくぬめりながらも、肉棒を狂おしく締めつけてくるような、狭苦しい弾力感に満ちている。

「ママ、とうとう一つになれたね。とうとう」

灼熱の肉壺のなかに根元まで男根を埋めた少年は、あだっぼく勃起肉を揉みこんでくる牝肉の感触に陶然としつつ、柔らかな尻の肉を指で掴んで握り潰す。

だが繭子は痛がらない。酒にでも酔ったように「あはあ」と熱っぽい吐息を零し、背後の少年の顔を見ようと窮屈な体位で髪を振り乱す。

「直ちゃん。ママ、幸せ。ほんとに幸せなの。擦りっこしよつ。直ちゃんとママのエッチなところ、いっぱいいっぱい擦りっこしよつ」

「はあはあ。ママ。何ていやらしい……」

「ひいひい。あはああ！」

色っぽい義母の媚声は蠱惑的な猛毒だった。直也はちりぢりに碎けた理性の破片が淫熱に炙られて燃え上がるような心地にかられながら、腰を前後に振り始める。

「あはあ。直ちゃん。き、気持ちいい。とろけちゃう」

直也がペニスで膣肉を攪拌し始めると、繭子はあられもない快感の言葉をほとばしらせ、艶めかしく腰をくねらせた。いつときも休むことなく上半身が蠢き、振り乱した髪から甘い香りが放散する。腰の上までたくし上げられて、乱れに乱れてくしゃくしゃになった浴衣の眺めが、少年をももの凄く開放的な気分させた。

「ママ、僕も気持ちいい。チンチン気持ちいい」

「直ちゃん、かわいい。むふうう、い、イイッ……」

二人は熱い吐息混じりに快感の言葉を口にしながら、性器の擦り合いに耽溺した。

思いきり股間を突き出すたび、下腹部の肉が剥き出しになった義母の尻桃をたたき、肉と肉がぶつかり合う生々しい爆ぜ音が響く。

柔らかな尻肉はブルブルと震え、彼の腰がクラッシュする部分の肉がうつすらと朱色に染まっていく。繭子は感極まった色っぽい声を絶え間なくあげ、両手で布団を掴んで引きちぎらんばかりに引つ張った。

「もつと擦つて。直ちゃんのかわいいチンチン、ママのエッチなお肉に擦りつけて」

「ママ。興奮しちゃう。僕、興奮しちゃう」

内に秘め続けた淫らな官能を露わにし、貪欲になって快感を求める愛しの美女の乱

れ姿に、直也は息苦しくなるほど恥悦を炙られ、体温を過熱させる。

髪が生え際から汗の甘露が滲み出し、胸や背中にも玉のような汗が噴き出すのが分かった。もうTシャツなど着ていられない。彼はガツガツと腰を振りつつ、両手を拳げて汗ばんだTシャツを脱ぎ捨て、全裸になった。

「あひい、はふう。か、感じるう」

彼の激しい突きに、清楚な熟女は喜悅の嬌声をあげ、徐々に上体を布団の上に突っ伏していく。やがてできあがる、移動途中の尺取り虫のような卑猥なポーズ。尻だけが天に向かって突き上がり、浮きあがった腹と太ももとともに、逆U字のラインを窮屈そうに描く、とんでもなく扇情的で下品な格好だった。

乱れてはだけた浴衣の襟から、灰白いうなじと背中が見えた。

たまらない劣情にかられた直也は、震える手で繭子の帯を解いた。

浴衣の合わせ目がはらりと割れ、この薄い布地の着物以外何も身につけていない美熟女の肉肌が露わになる。嗜虐的な肉悦に身と心を蝕まれた少年は、用済みになった帯を、しかしそのままにはしなかった。

「きゃん。な、直ちゃん、何を。あはああ」

困惑の悲鳴をあげる繭子の声に興奮を煽られながら、浴衣の袖から剥き出しになっ

た彼女の二本の腕を一括りにし、名古屋帯で手首を緊縛する。

両手の自由を奪われて不様に上体をつ伏す美熟女の扇情的な眺めが、少年の欲情をさらに一段階ヒートアップさせた。彼は「ママ。ママ」と愛しい義母を呼びながら、再び狂ったように腰を振り、発情性器の擦り合いに耽溺する。

「直ちゃん、は、恥ずかしい。犯されてるみたい。直ちゃんに犯されてるみたい」
布団に顔を擦りつけ、頬を突っぱらせて可憐な美貌を艶めかしく歪めた繭子が、あんぐりと口を開けて叫んだ。

「ママ。すごい興奮して……んはあ、オマ○コのなかから、エッチな熱い汁、い、いっばい出てくる……」

手首を縛って愛しい女を征服する、ソフトSM的なシチュエーション。

蹂躪される側の繭子にマゾヒスティックな高揚感が増したのなら、責める直也にはさらに加虐的な劣情が募った。もつともつと、この清楚で可憐な豊熟美女を辱めたい——そんな淫らな思いが膨張し、全身の毛穴が開いて、そこからどす黒い淫気が催淫ガスのように湧き出してくる心地になる。

「興奮しちゃうの。こんなカッコで犯されて興奮しちゃう」
バックからサディスティックに突かれながら、着衣の乱れた完熟美女は艶っぽい喘

ぎ声をあげた。直也と同様、一気に体温が上がってきたのだろう。その肉肌には見る見る汗の玉が噴き出し、ローションでも塗ったみたいになるぬると全身をぬめ光らせ始める。甘ったるい汗の香りが、蒸気のように揮発した。

「だからいやらしい汁がこんなに出てくるの？」

「ああ、恥ずかしい。直ちゃん、ママ、恥ずかしい」

いやらしい言葉に恥悦を刺激され、繭子は艶めかしく尻を振って腰をくねらせる。

「言つて。ママ、言つて。興奮してるから、いやらしい汁が出てくるの。ママ！」

「そ、そうなの。興奮……しちゃつて……直ちゃんに犯されてるって思ったら、何だか無性に興奮しちゃつて。オマ○コから……いやらしい汁いっぱい出ちゃう！」

身も世もない興奮ぶりで、「ふはあ。あふう」と熱っぽく喘ぎながら、繭子は日頃の淑やかさをかなぐり捨て、一匹の獣に返つてはしたくない卑語を喚いた。

ふと見れば、双子の尻桃の谷間では、鳶色とびの肛肉が息苦しそうにひくついていた。

激情にかられた少年の責めの矛先は、迷うことなくその禁忌な肉穴に向かう。

彼は片手の人差し指を伸ばし、ペニスで恥肉を搔き回しながら、皺々のアナルをほじるように搔いた。

「ひいひい。きやう、いや。あひいひい！」



アナルが一際ヒクンと派手に開閉した。

「興奮してるんでしょ、ママ。お尻の穴も、さつきからいやらしいことしてほしくて感じてヒクヒクいつてたもん」

廻るような、甘えるような声で言いつつ、直也はさらにほじほじとアナルを搔く。

「やめて。やめてえ。ああ、そんなはしたないこと。こ、興奮しちゃう」

「やめていいの。ほじほじされたんじゃないの？ ほら。ほら」

言いながら、繊細な恍惚神経の密集する卑猥な肉皺地帯を、さらに指先で直也はほじつた。好きだ。この美しい義母が好きで好きでたまらない。だからこそ、思いきり虐めてしまいたくなる。今まで僕につらい思いさせた罰だ——そんな手前勝手な理由でも、この人ならきつと許してくれるとどこかで甘えつつ。

「うう、恥ずかしい。直ちゃん、軽蔑しないで。ママ、うんと興奮してる」

楚々とした美貌を汗まみれにし、突き上がるような肉欲に瞳を潤ませて、繭子は「はあはあ」と荒い息を吐く。

「軽蔑なんかするもんか。正直に言って。こうやってほじほじされたいんでしょ」
直也は義母のアナルを爪の先でソフトにほじりつつ、答えを強要する。

「そうなの。むふう、恥ずかしい。そうなの。感じちゃう。ほじほじされたい」

今にも泣きそうな興奮した声で、繭子は恥ずかしい本音を言葉にした。
そんな彼女が愛しくて、直也は「ママ。ママ。ママ」とうわずつた声で呼ぶ。

「ほじって。もつとほじほじして。感じちゃう。ああ、チンチンも気持ちいい！」
名古屋帯で一括りにされ、真つ赤に鬱血した十本の指がせつなげに蠢く。繭子は猛烈に興奮し、気が違ったように髪を振り乱し、あんぐりと開けた口から涎を溢れさせた。

尻肉はもちろん、尻の谷間にも汗の微粒が滲み出している。彼が指を蠢かせるたびに、汗が攪拌されてニチャニチャと卑猥な粘着音を立てた。皺々の肛肉が絶え間なくひくつき、愛おしそうに少年の指先を食い締めてキュンと締まる。

「ママ。もうだめだあ」

どうにかなつてしまうのではないかと思うような凄まじい高揚感にかられ、直也は猛然と腰を振った。

発情した二人の性器がもの狂おしく擦れあう部分から派手な攪拌音が響き、カリ首に掻き出されるようにして、煮込まれた愛蜜がしぶきながら噴き出してくる。

二人の身体が、地震に急襲されたかのように激しく震動した。

直也も繭子も、何か大事なものがプツリと切れてしまったかのように激しい恥悦に

溺れ、全身をガクガクと震わせて性器の擦り合いに没頭する。

「擦ってる。硬いチンチン、ママのおマ○コにいっぱい擦れてる」

「ママ。気持ちいい、ママ」

一気に射精衝動が膨張した。アナルをほじる指にも、さらに加虐的な力が漲る。

「ひいいい。ほじほじ気持ちいい。お尻の穴疼いちやう。直ちやん、ママもうだめえ」

アクメの瞬間が近づいてきたのだろう。繭子は獣のように「おう、おう」と淫らに咆吼し、柔らかな背筋をさらに凄艶にしならせた。美熟女の膝が布団から浮きあがるほど、高々と尻が持ち上がる。それは直也の激しい突きのせいか。それとも、麻薬のような激情の虜になった義母の、猥褻な興奮のなせるわざだったか。

「出る。もうだめ。射精する！」

息を止め、少年は亀頭を繭子の膣壁に擦りつけた。肉傘の縁が微細な膣肉の隆起を擦過し、濃密なカウパーが長い糸を引いて膣奥深く飛び散った。

「射精して。なかに出していいから。ママが全部受けとめてあげるからあ」

脳髓が、砕けたパイナップルみたいに粉々になりそうな艶っぽい嬌声だった。目の裏が白く明滅する。足元から無数の小蟲がさわさわと這い上がってくるような感覚に囚われ、背筋に何度も悪寒が走った。菌茎が疼き、分泌される唾液がとてつもなく酸

つぱくなる。脊髓が焼けた鉄柱のように赤くなり、陰囊の輸精管が悲鳴をあげた。

「で、出る！ 気持ちいい！ あああ!!」

「イクう！ 直ちゃん！ きゃああ!!」

びゆるどぶぢゆうう！ どびどびどびどびっ!! どびゅぶりゆう!!

脳の血管が破裂しそうな激震が、少年の肉体を直撃した。彼は義母の膣のなかに根元まで陰茎を埋めこみ、天を仰いで射精の悦びに身を焦がす。

「ああああ！ はあああ!!」

どうやら繭子も一緒に絶頂に達したらしい。ビクビクとダイナミックに全身を痙攣させ、色つぼく口を開けたアクメ顔で、恍惚の極北に浮遊する。

「あつ……ああ、マ、ママ……ああ……」

自分でも驚くほど大量の精液が、とぶとぶと義母の膣のなかに射精されていく。

少年は長い時間をかけ、愛する義母の胎内臓器にできたての子種を注ぎ込んだ。

それでも繭子の膣は貪欲だ。「もつともつ」とねだるように淫肉を妖しく波打たせ、さらにペニスを甘酸っぱく絞り込む。直也は目を白黒させ、「ぐああ」と間拔け

な声をあげながら、尿道のなかに残っていた精液の残滓をどびゅつと噴き出させた。

「はああ。気持ちよかった。ママ、すごい汗……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです

「小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ



女幹部メル様の
セカイ征服計画!

「小説…高岡智空 / 挿絵…鈴原依縫

全国書店で
好評
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!



既刊LINEUP ● 仙聖字態戦姫 / ブナガツ ①～③
● 純魔 / 帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりに語る悪者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の短剣士がSMに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 歌組後らい節 / カースイーター-1
● 魔海少女ルレイ・エル

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはこころみ。お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!